



国際児童年1979



テー マ
友情の輪を世界に

国際児童年記念
浜松子どもフェスティバル
54. 11. 18
於 佐鳴湖公園



撮影 高倉清雄

青少年の育成に思う

浜松第25団副団委員長 尾川安雄



「その国の青少年を見よ、青少年こそ、その国の鏡である、「豊さへの挑戦」に血眼になって来た日本に実現した物質的豊さの背後に忍び寄っていた歴史的变化に、未だ目を開こうとしない多くの人々がいる。G.N.P世界中二位などと有頂天になっているこんな中で、「豊さからの挑戦」を受けていることを認識し、「教育の危機」に対し、警鐘を打ち鳴らし、ボーイスカウト教育に、全身全靈を捧げて来た諸先輩に心からの敬意を捧げるものであります。豊さの実現の中で曇り行く鏡を見て日本の大人達は愕然とし、打つ手を知らないのが現状ではないだろうか。子供の教育に対する目標と自信を失ってしまった大人達のもとで育つ青少年が、どんな事になるかは明々白々である。遠く明治42年に出版された夏目漱石の『三四郎』の冒頭の章で、熊本から東京への車中で浜松で買った駄弁を食べながら青年三四郎と髭のある40才位の男のこんな会話がある。——「いくら日露戦争に勝って一等国になんでもだめですね。もっとも建物を見ても庭園を見ても、いずれも頗想應のところだが……、いまに富士山が見える。あれが日本一の名物だ。」「しかしこれからは日本もだんだん発展するでしょう。」「滅びるね」「熊本よりは東京は広い。東京よりは日本は広い。日本より…。」「日本より頭のほうが広いでしょう」「とらわれちゃダメだ、いくら日本のためを思ったって、ひいきの引き倒し

になるばかりだ。」あれから40年、昭和20年8月をもって旧体制は本当に滅びてしまった。あの時、オーランダフル、フジヤマ！と絶賛したのは占領軍の兵士達だった。あの日から34年の歳月を経た現在、我々大人達は青少年に何を語りかけたらよいだろうか……。次代を開いて行く現代の青少年の育成こそ、我々に与えられた歴史的な課題である。このために必要な時間と労力は、計り知れない大きなものであろう。しかし、どんな困難があろうとも成さねばならない重大事であります。学社連携、家庭教育の重要性を呼ばれているにもかかわらず、学校教育偏重は目を覆いたくなるような今日この頃である。朝は早くから夜は遅くまで、日曜日も部活の為学校へ。これでは社会教育も、家庭教育もあったものではない。スカウト浜松第76号の中で、ボーイ隊の一少年が述べている本音を私達大人はしっかりと受けとめ、学社連携の実を揚げる為、学校教育の行き過ぎに歎止めをかける秋が来ていると痛感するものである。ここに私は勇気を奮って提言する。学校は日曜日くらいは子供達を自由にすべきである。「ボーイスカウト教育こそ唯一無二のものである」と確信を持って述べられた内田地区委員長の言葉をしっかりと胸に刻み、スカウトと共に前進したいと願っています。発團して2年目、何もわからない第25団に今後ともよろしく御指導を賜ります様切にお願い申し上げます。

ボーイスカウト静岡県連盟

第3回シニアスカウト ヒルモント派遣隊報告

昭和54年7月26日→8月15日 於：アメリカ・ヒルモントスカウトランチ

ヒルモント派遣を終えて

派遣隊長（浜北第1団）外山吉保

今夏に実施されました、県連第三回SSヒルモント派遣隊にリーダーとして参加することができ、然も初めての海外遠征に派遣隊長の重責を押命し、その重責を無事に果たすことができましたのも、永年小生をはぐくんでくださり、良き先達として導いてくださいました浜松地区の皆様をはじめ、多くのスカウト関係の皆様のご支援があったればこそ、と深く感謝いたします。



ヒルモントスカウトランチ正面ゲート

「もの思う秋」と言われますが、過ぎゆく夏を思う毎に、ヒルホントの苦しい中にも素晴らしい訓練、雄大な自然、明朗活達なヒルモント・スタッフの顔、アスペンを通して見た澄んだ青空など思い起こされます。

ヒルモント訓練を終えての感想を以下に述べさせていただき、報告の責めを果たさせていただきます。

★大自然の中のスカウティング

ヒルモントは実に広大です。山あり谷あり、原生林あり、想像した以上に広々とした所であります。自然を考え、自然に立ち向かい、自然と親しむ。大自然の中でスカウトの技と心を磨くことができる、本当のスカウティング・パラダイスであります。原生林の間や谷川をぬうようなトレール（巡路）、ぱっと視界がひらけたような大平原、ビッグベア・スマールベア（しまリスのこと）エルク、野うさぎとの遭遇など全てがスカウトの行く手に持ちかまえています。

★自主的な計画と自主的な実行

ヒルモントに参加するものは、全てプロジェクトを持って出かけます。米国のスカウト達は、ヒルモントのトレールを歩くことを最高のプロジェクトにしているようあります。

到着するとすぐにプランについての打ち合わせをクルー・リーダーが中心となって詳細に打合せをします。

訓練中、リーダーは余り口を出しません。全てクルー・リーダー中心に自分たちのプロジェクトを完遂していくようです。自分たちでなしとげたという自信がここから生まれて来るようです。見習うべきことだと思いました。

★合理的な野営法

すそがあがったグランドシートつきの携帯テントは、簡単に取り扱えて、然も溝を掘る必要がありません。食糧も4人分のパックで、炊飯の必要がないものでカロリーのある食物がくふうされていますので、日本のように三度とも火を起こして調理することなくプログラムにたっぷり時間をとれるようになっています。

Scouting Paradise

浜松第24團SS隊 辻徹太郎

昭和54年の夏、僕はボーイスカウト活動の中で最も栄誉ある海外派遣に参加させていただきました。場所はアメリカの中西部のニューメキシコ州のシマロン市のはずれヒルモントです。ここはたいへん環境がよくアメリカのきびしい自然そのものがそこにはあります。そして世界各地のスカウトがヒルモントのトレーニングを受けに来るのでです。

トレーニングはジャンボリーのようなものではなくたとえれば学校のキャンパスにいるようなものです。講師陣達はスタッフと呼ばれる20才前後の試験を通ってきた世界各国の最もすぐれたスカウトです。（日本人のスタッフもいた。）そして学生である我々はアドバイザー（副長）と10名のスカウト、1名のスタッフとで各キャンプを移動、そこのプログラムを消化してゆくわけです。

アメリカでは Time is money（時は金なり）の精神に基いた教育方針をとっているためそれなりにきびしい面もありました。しかしもっとも感動した事に、彼らは大自然とうちとけあっているのです。草、木、動物たちと友情で結ばれているのです。日本へ帰って今、草、木、動物と遊べるようなキャンプ。これこそ本物のスカウティングではないでしょうか。



Mt ヒイリップス (3,570m) 頂上にて

ヒルモント訓練に参加して

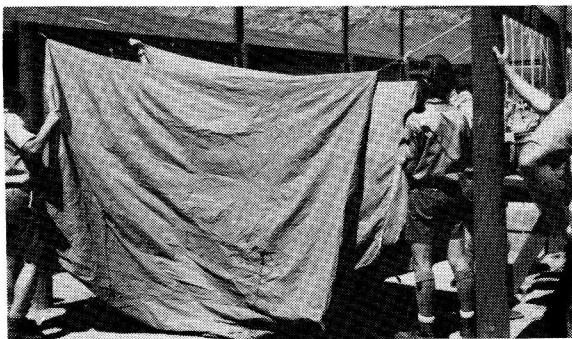
浜松第6團SS隊 木下生樹

7月26日19時30分飛行機が動き出しそして離陸、大阪の街の夜景が流れるように動いていった光景をはっきりと覚えていました。果たして使えることのできるか赤ちゃん程度の英語でどの

程度通じるのであろうかという不安な気持ちで米国へ入国しました。しかしその不安もホテルのフロントで鍵をもらうことができたりタオスの街では、本などを買ったというささいなことでその不安もふきとんだ気がしました。

そして、その日にフィルモントのヘッドクウォーターに入りました。8月1日コースに入りました。テントのピンをうつのに石でたたくのではなくて手で押し込む、側溝はほらないと日本のキャンプとは違うなあと強く感じました。熊がでたり、鹿がいたりとにかく広いところだということなどなどおどろくことばかりでした。2日目あたりまだなれていないので、とても疲れました。訓練不足だったかな?、4日め5日めとだんだんなれてきましたして絶好調でした。しかし悩みは足のまめ、しらぬまにできていた、大きくなっている曲者でした。63マイルのコースでキャラバンシューズもだいぶくたびれたようでした。

正直なところ感動しそうに書くに書きようのない、うまく書けないといったところです。申しわけありません。しかしこの2つははっきりと言えると思います。わざながらであるけれどもスケールの大きいアメリカの一端を体験したことと、ほんのちょっと話す英語に自信がついたということです。



キャンプ用具の点検

ヒルモント派遣

可美第1団SS隊 鈴木和彦

ぼくにとってこのフィルモント派遣とは、今までの中でも最高の出来事となりました。一生を通じても最もすばらしい経験の一つになるはずです。また、これから的生活でこの体験を常に生かしていくといきたいと思います。

『Look wide』というテーマは充分達せられたと思います。なぜならばアメリカの西部と一部を回っただけでもその拡大さに驚かぬ者は一人としていなかつたはずです。また見る物触れる物何から何まで、感動しました。全く異質的な外人の中での二十一日間いろいろな事を学びました。行ってから言うのもおかしいのですが、英語をあまり得意としない自分がヒアリングに関しては帰って来て始業式の日に行われたテストにさっそく成果があらわれました。アメリカそして現地の人たちを理屈でなく、自分の目で耳で体で少しではあるが理解したようなつもりです。

しかし、残念な事に日本のスカウトは全くといっていいほど、フィルモントの事を知らない人が多い、その中で静岡県での三回目の派遣隊として参加でき、大変ありがたく思っています。が、もっとこの活動を盛んにさせ、世界最大と言われるアメリ

カ連盟のフィルモントキャンプ地での生活を一人でも多くのスカウトが体験して国際的視野を広める事を願っています。



クレーターレーク Camp の丸太ひき競技

ヒルモント訓練を終えて

浜松第24団SS隊 宮分和浩

7月26日から8月15日までの21日間行なわれた、ヒルモント訓練派遣を通して僕はいろいろなことを学びました。

僕から見たアメリカ人は、あけっぴろげでゆかいで感情をそのまま態度に表わす、そんな風を感じました。たとえばヒルモントで行われたキャンプファイヤーをとっても、みんな自然に1つになってゆかいで楽しいキャンプファイヤーにしようと協力し、また指名されてなにかするときでも、いやな顔せず自ら協力していました。

その点日本人は、うれしい時でも楽しい時でも、なにか自分にブレーキをかけるような所があると思います。それは時には自重するのも必要なことだと思うけれど、お互い自重しあっていてはその場の雰囲気をこわしかねないと思います。

僕はアメリカへ行って学んだことは多くあるけれど、その中でもこのことを強く感じました。

これから生活していく上で、人間どうしのつき合いの上で、アメリカ人をみならうことは大切だと僕は思う。

第3回ヒルモント派遣を終えて

浜松第6団SS隊 渡辺立名

日本へ帰って来てから、「どうだった」と何回聞かれただろうか……。

僕は、今回の派遣を行った事をとても感謝している。なぜなら話で聞いていた以上にすばらしい所だったからだ。

キャンプに入った頃は、あと〇日早く終わらないかなあと指折り数えていたのに、キャンプが終る頃になんでもうあと×日しかないと言いだすほどすばらしいキャンプ場だ。雨降り、カンカン照りetc…と、きついことは、いくらでもあるけれど、とにかくそんな事までがすばらしい思い出となってしまう程だ。

Philmont Hymn という歌の歌詞に Scouting Paradise とあるが、ホントにこの歌詞はピッタリである。 Philmont Scout Ranch はスカウトの園である。これからシニアーになる人、シニナーの人も、ボーイスカウトに入っているのなら、ぜひここへ1回は行ってみるといい。口では表わせないほどすばらしい所だという事がわかる。

僕もぜひ、もう一度行ってみたいと思っている。

**昭和54年度ボーイスカウト
ガールスカウト
静岡県(西部会場)大会
=袋井市営グランドにて開催=**

浜松地区コミ 牧野 繢

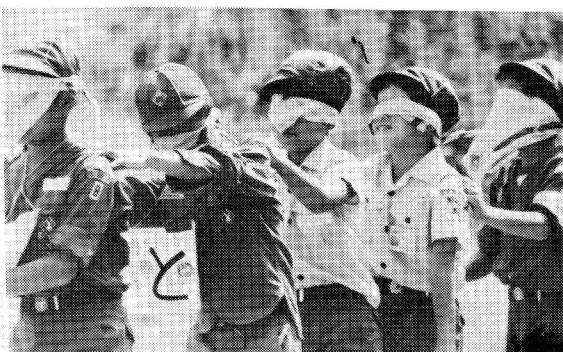
4月29日県大会(西部会場)の当番地区の袋井地区が第1回の会議を招集、地区発足後日の浅い地区のため意義ある大会にしたいと、西山袋井地区委員長を初め大変の熱の入れようであった。当日は県西部の野営行事委員長、地区コミ、事務長など



G S関係者が会議にのぞみ、現地等を視察し、開催日を来る9月16日と決定、その後、数回に亘り計画をねり会議を重ねた。

大会前日の9月15日午後、現地で地割り及び各地区ゲームコーナーの設営が開始された。浜松地区からはコミ陣が主体となり、泊りがけで設営にあたった。

大会当日は雨の心配もなく薄曇りの大会としては最適の日よりであった。10時開会のセレモニーが挙行され、その後スカウト行事に移り、C S、G S ブラウニーは“ともだちとあそぼう”の文字合せゲームが展開され、会場狭しとスカウト達は右往左往。9人と云うチームはC Sではなかなかむつかしく、途中で迷い子が出て本部はてんてこ舞であった。一方、B S、S Sは、8km、10kmコースのハイキングに挑戦、地図とコンパスを片手に、それぞれ出発した。大会広場ではチームを作ったC S、ブラウニーがそれぞれのコーナーに挑戦、浜松地区的コーナーは【宇宙遊泳、空中散歩】、さすが他地区に比べ雄大で終日順番を待つスカウトの列で交通整理をするリーダーもくたくた。さすが浜松地区でのコーナーであった。15時閉会式のセレモニーが行なわれ、大会参加綬を地区代表団に授与され大会の幕がしめられた。

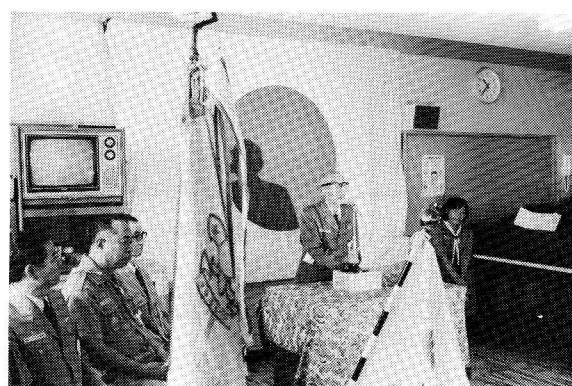


浜松第1団結成

25周年記念式典を終えて

浜松第1団 柴田 薫

9月15日我が浜松第1団の結成25周年記念式典には、ご多忙のところ多数のご来賓・指導者・スカウトの皆様のご来駕を頂き、かつ身にあまるご祝詞を賜り幸せを心より感じました。大変有難うございました。式典までには数度の打合せをしましたが、先輩の話を聞き、又25年のあゆみを調べて、今更ながら25年の偉大きさを感じると共に、今後への一層の発展努力を誓ったものです。25年前を振り返ると、結成時の苦労、そして訓練開始より第1回の野営への運びまで、野営具の不足・輸送問題・食糧・被服等の問題等々と、当時は品不足であり何よりもこれ等の問題が先であったのでした。この条件下で唯々「おきて」の実行に心掛け、「おきて」を心のよりどころ、として来たのでした。「創設者は偉大であった」と言えると共に、その偉大きさに比して苦心があった事と、まじまじ感じました。我々は先輩より継承し籍を置いていますが、「温故知新」の心を持つべきで、現在は恵まれ過ぎていて、今一度總てを見直すべきではなかろうかと思います。又、スカウト教育の總ての「ちかい」「おきて」の実行を再度「原点に還り」誓いを新たにすべきだと思いました。



式典を迎える数日前、1人のローバースカウトが、急病で入院、危篤状態となりましたが、隊の仲間のスカウト達は申し合わせて徹夜の看病をし、元気付けました。その友誼・勇敢・親切な気持ちこそ「おきて」であり、スカウトであろう。我々はスカウトの先頭を歩む始動者で、スカウト達に「おきて」の実行を話してきました。成人となり良い公民に育ってくれたかと思っていたローバーたちが見事に実行を果してくれたことに涙を流して喜こんだものです。これも先輩から受継いだ、浜松第1団の心が育ち、これからも継がれて行くと信じます。

式典前には団全体の野営行事が行なわれ、又式典時も共に沢山の育成会の方々がご奉仕、ご協力して下さいました。この協力こそ1団が今後に発展へのエネルギーであろうかと、心強く思い「浜松第1団ここにあり」と胸を張ることが出来ました。我々は次の世代にミバトン、をタッチしなければなりません。今までの育成にご尽力下さった先輩諸兄より受けたミバトン、の重さをしみじみ知ると共に、次に確実にタッチする義務を果すよう一層の努力を、此の式典を機に新たに誓ったものです。

浜松第20団10周年記念日を迎えて

浜松第20団々委員長 竹村徳一

私達浜松第20団が今日10周年記念の式典を挙げる事が出来ます事は本当に嬉しく思います。と同時に月並な言葉でしかれど、西も東もわからなかった、私達を、今まで育てて下さった先輩諸氏並びに友団各位のご指導の賜と深く感謝申し上げます。

顧みれば、昭和44年5月、入野出張所に於いて地区委員長はじめ、内田嘉一氏など多数の方々においで頂き、説明会が開かれた時にPTA会長として出席させて頂いたのがきっかけで、三指の敬礼の意味もわからぬまま団委員長を引き受け、ただひたすら情熱を傾けて参りました。

リーダーや団委員の献身的な努力は云うに及ばず、育成会員の側面からの応援と、よき先輩のご指導を得て今日の20団に発展して参りました。今後は組織の拡大と共に質の向上と内容の充実したスカウト活動をしなければと思っております。それにリーダーも団委員もここで一度ボイスカウト運動の基を見つめ、心新たに明日に向かって進みたいものです。

今後共一層のご指導を頂きますようお願い申し上げます。



会をしたり、話合いをすると云う姿勢がなかった事は私の責任でもあり、深く反省している。それと共に各団の担当委員の方々にご参集を願い、説明と協力ををお願いする機会をもつべきであった事も同然である。これらの事を考えるとブロック（小地区）内に委員会組織を発足させる時代に来ている事が明らかであると思われる。これらは運営の面に於ける大きな反省点ではなかろうか。

開会式、組集会、運動会、夜店大会と云う第1日はまあまあ楽しいムードで大むね成功であったと思う。第2日は途中で雨にやられた事が少しタイミングを狂わせてしまった。けれども子供達は皆それぞれに楽しんでいた事は事実であった。然し、DMや付添の女性の中に先をいそぐ大人の心理が露骨に見えて好ましくない一面があった。組行動が主体であるべきなのに、いくつかの組が集団になってしまったりバラバラになってしまったり、大人が見せる打算的行動が知らず知らずの中に子供の心に影響を与えている事に思いをはせて貴い度い。降ったりやんだりのあの天候の中でぬれたくない、早く引上げたいとひたすら考えていた人々であった。子供達はくったくなくはしゃぎ廻っているのに。この様な集団行動はそう沢山はない、よいチャンスである。良い勉強の機会である。リーダー、DM、それぞれ自分自身にとって勉強の場である筈、そんな意味で各人が前向きに取組んで自分の任務を果して下さった事に深く敬意を払い、地元の観光協会長さんを始め、多くの団委員、方広寺ご当局に深謝して反省の記とする。



西部小地区カブラリー反省記

浜松第12団々委員長 宮沢 広士

何年も前から何回も話題になっていたカブラリーが西部と引佐・細江の合同で奥山で開催された。理論的には可能でも、現実のものとなる為には時の流れやリーダー全員の雰囲気などがピッタリと一致しないと出来ないものであることを痛感する。

今回のラリーは1泊2日の日程で楽しい行事で埋っていた。しかし、それを実現する為に9月（当月）のテーマを“草燃える”と題して各隊は第1、第2、第3組集会を実施し、月例隊集会の形でラリー当日があると云う考え方で実施された。従って何の為にどの様な工作をするのかと云うことは、第1組集会でDMからよく説明されていなければならぬ筈なのに、スカウト達の間に余り徹底されていなかった様に感ずる。大人の工作であり大人の組集会であって、主体であるスカウトはどうなってしまったのでしょうか。本来組集会も隊集会も、それ自体が遊びでなければならない筈なのに、子供達にとっては困難で面白くない仕事として映っていたとすれば大いに反省を要することになろう。

開催地が引佐町であった訳だから、現地の団へ出向いて打合

永年の懸案が実り訓練用テントを地区が貸与

浜松地区コミ牧野績

数年来より、浜松ロータリークラブ、及び浜松ライオンズクラブから、スカウト活動のためにと多大の援助をいただいておりますが、地区内のスカウト人口も増し備品の購入、修理にとて所はなかなか大変であります。又、昨年は第7回日本ジャンボリーが開催され、何かと経費がかさみ、毎年話題となる訓練用テントの購入ができませんでしたが、本年度ようやくこれが実り、11張りを購入、夏季訓練に間に合うよう次の団に地区委員長から貸与されました。

浜松第1団	浜松第4団	浜松第6団	浜松第11団
浜松第12団	浜松第14団	浜松第15団	浜松第19団
浜松第21団	浜松第22団	浜松第24団	

西部小地区キャンポリーに 参加して

浜松第11団B S-1隊長 富田 扶司夫

今年度のキャンポリーは、西部小地区としては異例の遠隔地、富士グリーンキャンプ場で行なわれた。7月26日～30日までの4泊5日、しかも遠方とあって最初の予定6個団120名位の予定が、4個団50名足らずとなってしまったが、集まったスカウト達の顔を見ていると、人数の多少は関係なし、闘志満々と云った活気に満ちている。夏休みに入ってすぐのキャンプとあって、中学生の姿は少なく、全体に小さめである。不安と期待を抱きながら一路富士へ向かった。富士はあいにくの空模様で、肌寒く感じられる程である。サイトへ向かうスカウト達は、原生林の奥深さ、雄大さに一様に驚いた様で、どの顔も不安気である。さらに資材運搬が大変な重労働であった。山道を約1kmも重装備を運ぶ事は、小学生には相当こたえた様である。

悪戦苦闘して運び終える頃から雨が降り出して來た。疲れた体にムチ打って全員が一丸となって、各サイトが立派に出来あがって行く……。とくれば苦労はないのだが、キャンプは初めてというスカウトが多く、リーダーが口ずっぱく指導しても、思う様に事は運ばず、サイトが出来あがる頃は、すでに周囲は薄暗くなっていた。これから4泊5日、こんなベースで乗り切れるのだろうか、心配に思ったのは、私一人ではないだろう。しかしキャンポリーのプログラムが、次々と消化されるに従つて、スカウト達の動きも軽快となり、各隊行事、交歓会、ハイキング、營火、富士登山、移動キャンプなど豊富なメニューを何の苦もなくこなして行く。決して恵まれた天候、充分な設備ではなくとも、スカウト1人1人が、それぞれの立場を自覚し、自分の役割を果たせば、どんな事もやりとげられる事を立証してくれた。今度のキャンポリーは、あいにくの天候で、5日間富士の姿を見る事ができず残念であったが、スカウト達には、この貴重な体験が強烈に胸に焼き付き、これからスカウト活動に、社会人として立派に活用して行ってもらえると思います。

4泊5日リーダー、スカウトの皆さん本当に、お疲れ様でした。これからも西部小地区の発展のため、共にガンバッて行きましょう。

最大の長期キャンプ

浜松第7団ボーイ隊コンドル班長 岩谷 新次

4泊5日。これはぼくにとっては最大の長期キャンプとなつた。今まで、班長訓練野営、キャンポリー、といろんなキャンプを経験してきた。しかし、そのプログラムの中には、4泊5日のキャンプというのはなかったような気がする。B Sに入つて3年しかないが、ぼくのB Sでの訓練で一番心に残る事であろう。

このキャンプでの一番の収穫であったのは24団との交観会にあったと今でも思っている。ぼくがB Sに入ったころの24団は大きい人ばかりで、しかも級も2級、1級クラスの人ばかりであった。しかしその予想を打ち破って小さく、初級ばかりであった。でも、これにはぼくは裏があると考えている。でも、24

団の人たちには、思いがけないものをぼくたちにあたえてくれた。それは、自分の団だけで固まつてはいけないということであつた。24団の人々はそうぞう以上にぼくたちの心に速くとけこみ、そして永遠の友達にもなろうとしている。24団と別れた後「おれ、あいつの所に手紙出してやろう。おれも。」といった声がきこえた。これでなければいけないとぼくは思った。

まだまだある。「キャンディ、フー。」というのも、交観会がおわったら一速く24団も取り上げた。名刺の交換も。目をつぶれば、ほんとうに24団はぼくに大きな希望をあたえてくれました。24団のリーダー、そしてスカウト達、ほんとうに大声でありがとうといえるほどである。

しかし、それだけではない。大営火の各団のスタンツ、リーダーの歌、千葉隊長のリードでやったゲーム、別れにみんなはればれした顔で手を振ってくれたこと。それ以外はもうレポートでは、表現できないほどの楽しい思い出が、いっぱいいまっている。

これまでほんとうに心に残る一つの思いでが出来た。この4泊5日は、ぼくのB S訓練での一生の思い出となる出来ごとであった。

富士グリーンキャンプ

浜松第11団ボーイ隊 片岡 明浩

富士のキャンプへ行く前ちょっと不安だった。なにしろ4泊5日のキャンプは初めてだったからだ。富士に到着してバスからおりたときは一面の霧で、このようにすごい霧は初めての体験だ。しばらく休憩していたら霧は晴れた。山の気象は変化が激しいと思った。

1kmぐらい登って目的地へ着いた。その後、設営にかかった。そのとき雨が降ってきたのでいそがなければびしょぬれになる。荷物を運んだり、かまどを作り夕食の仕度をした。ぼくたちは協力して一生懸命やった。腹ペこで夕食についたのは予定よりだいぶ遅れ、辺りはまっくらになっていた。その日は疲れて皆な早く寝た。ぼくは、横になってから皆なで協力して作業をすることで一つ一つ物事を解決していくことを感じた。明日以後も皆など行動することを思うと不安はけし飛んだ。次の日は、静鉄スカウトとの交流会があり、仕度をし、静波海岸へ行った。またちがう所へ行くので好奇心がわいた。むこうへ到着して、その日、海で泳いだりキャンプファイヤーをやったりしてとても楽しかった。三日目は、キャンプ地の閉所式であり緊張した。富士へもどる途中、夕食も食堂ですませて、その日は疲れていたのですぐ眠ってしまった。4日目は朝食といっしょに昼食も作った。疲れはのこっていたがうまくてくれたと思う。この日は、とてもよい天気であった。この日、大沢崩れを登った。これはとても雄大なものであった。大岩がごろごろとしておりすごかった。セメントで作ってある防石堤もくずれていた。自然の力はすごいものだと思った。どうにか登ったときには、へとへとであった。この日はとてもよい体験をしたと思う。その夜のキャンプファイヤーはとても楽しかった。この夜はとてもよい気分で眠れた。ぼくは、この4泊5日、皆と協力することによりできる貴重な体験をしたと思う。

* 浜松第25団 * スカウトのひろば *

組長になってからの思い出

カブ隊 新村祐一郎

2組の組長になって、はやくも半年がすぎた。この半年の中の思い出が、いろいろと頭の中にたたきつけられている。

その中で、もっとも強くこっていることがある。それは、村櫛海岸へ行って一日とまったことである。はじめ、まず人がのれるくらいのダンボールでボートを作った。そして、そのボートで、きょうそうをすることになった。しかし、みんなのる時からでんぶくしてしまった。ぼくは、この次やる時は、しっかりしたボートを作ろうと思った。みんなもそう思ったにちがいない。それから、きもだめしもやった。ぼくは、しっかり組をまとめていかなければと責任を感じた。しかし、みんなおもしろそうな、こわいような顔をし、ゆっくりゆっくり歩いた。その時ぼくも、おもしろいような、こわいような気がした。そして今思うには、カブスカウトは、こわがってはいけないという事を考えさせられた。そして、きもだめしは雨がふり、いくつか中止になった。しかし、ぶじ終った。そして隊長が話をしてくれた。ぼくは、カブスカウトに入ってから話をよく聞きとれるようになった。カブスカウトに入ってよかったとつくづく思った。そして、カブスカウトのさだめを守り、まじめにしっかりした生活を送りたいと思った。

カブライ

カブ隊 倉田泰行

9月23日朝9時に公会堂にあつまり、出発したのは9時半ごろで、とてもまたされました。会場では、ふりそうだった雨がふってしまい、とてもたいへんでした。

一番最初の種目は、たかがりでした。ぼくの予想では、木のえだなどにひっかかっているとおもっていたが、入れ物に入っていたので、とてもらくでした。バナナがとてもおいしかったので、もっとほしくなりました。石橋山の合戦の時、よくおこられたけど、とても迫力があった。トラがりは、よくこつをおぼえていなかったので、ぜんぜんあたらなかった。鳴子は一番最初に当たりそうになったので『ひやっ』としました。富士のまきがりは、そのままにはらに力を入れすぎて、よろいがこわれてしまったので、たいへんでした。ざんねながら番号をよまれてしまいました。

だんのうらの合戦では、ちょっとちゃくちの時にすべってしまった。やしまの合戦、一の谷、そして富士川の合戦と、ぜんぶうまくいきました。とくに富士川の合戦では、みごとに5点のかもに当たりとてもうれしかった。ほんとうに良い思い出になりました。

組長になつて

カブ隊 松尾圭介

今年組長になった。組長になってからいろいろな事があった。その中で反省したい事、ここはよかったと思う事、いろいろあ

る。集会が終って、今日はしっかりならばせただろうか?。隊長のサインは見おとさなかつただろうか?。どんな小さい事でも、よく反省して次の集会には気をつけるようにしたい。それと、組長になつたら、せいれつや集会のじゅんびなどいろいろな役目が多い。「前ならえ。」と大きな声でいっても、次長と次の人がうっかりしている場合がある。ようやく並んだと思うとはなし声が聞えてきたりする。どんな事でもきっとするということは大変だと思う。やはり一人一人が協力して、はじめてまとまりのある組となり、団となると思う。この一年間、一生けんめいにがんばりたいと思う。組員が集まってくれなかったり、しゃべっていて、きいてくれなかつたりするから大へんだ。こまる。時々あまりうるさいと「うるさい。もっとしずかにしろ。」と大声でどなる。そうすると、うきぎの人たちなんかは、ちょうどいのつて「はい、ヘイ」とか変なふうにこたえる。とにかくそれがいけないので。もっとちゃんとやっていれば、ぜんぜんこまらないわけだ。これからは、そういう事に気をつけやつて行きたい。

八月の隊集会

カブ隊 正田吉位

ぼくたちは八月の隊集会にダンボートを作つて組ごとに競走するようにきまつっていました。ぼくたちの組をいっしょけんめいみんなで考え方を合わせてこれならばしづまいで最後まで競走できるボートを作りました。

時がきたので静かに水にうかべました。これから競走です。うかべた時はじょうできでしたが、それに人がのりこんだとたんにボートは横にかたむいてしまいました。でも、他の組との競走があるので、みんなでボートをしっかりもつて、ちんばつしないようにがんばった。一人、二人とやっていくうちにボートのすがたはむざんにも、こわれ、最後の人はやつと木にとまつていた。それでもレースはやりとげることができた。ぼくはほんとうにたのしかった。5年生なのであとすこししかないカブスカウトです。なんにでも参加して心にのこるように、いっしょけんめいやりたいです。

組長になつて

カブ隊 野中茂美

ぼくは、カブ隊に入って今年初めて組長になった。組長になつた感想は「すごくたいへんだ。」ということです。

組集会や、隊集会などは、ならばずだけで、苦労します。たつたの6人がなぜ「あつまれ。」でこれないのかな。ならばずのだけでも苦労するのに、夏のキャンプなどは、とてもたいへんな仕事がたくさんあります。一泊二日なので、その準備がたいへんです。ゲームとか、いろいろやることは、組長がぜんぶ説明もしてやらなければならないので、組長はたいへんな仕事だと思います。ぼくがしっかりすれば、隊員もしっかりすると思います。だからいろいろな役目や仕事を、しっかりやっていきたいと思います。

*浜松第4団*スカウトのひろば*

富士登山

カブ隊 渡瀬 浩康

7月24日、前から楽しみにしていた富士登山をする日となつた。午後10時隊ルームを出発した。ぼくは、楽しみと不安で一杯になつた。前から思つてゐたが、日本坂トンネルの事故の後がどうなつたか見たいので、それまでは寝ないことにした。日本坂トンネルに近づいてもあまり渋滞しないので、夜だから渋滞しないのかな?と思っていたら、突然渋滞してきた。なか



なか進まないので日本坂トンネルを見たい気持ちとねむい気持ちと一緒にになりイライラした。日本坂トンネルを過ぎると、今までの渋滞がウソのように思えるほど速く走り出した。高速道路から見る夜景は、普通の夜景とは少し違うようだ。夜景もみあきたのでねむろうと思ったが、ねむれなくなってしまった。それでも清水から沼津あたりはねむっていたようだった。高速道路とも別れると普通の道路だ。けれども車があまり走っていないので快適だった。午前2時頃ボーイ隊とグリーンキャンプ場で合流した。2時半頃には新五合目についた。ここで朝食を食べた。五合目の寒さは、浜松の真冬より寒く感じた。歯がガタガタとなりだし、まるで凍りついたように体が固くなつた。グループに別れて登りはじめた。六合目あたりでボーイに言われ、ゴミを捨てながら登っていたら、隊の最後尾になってしまった。けれども、「がんばってね。」とか「えらいね。」と、登っている人や、降りて行く人に言われてうれしかつた。これではまるで富士山クリーン作戦の続きだと思った。そのうちしゃくな雨が降ってきて雨具を着たらゴミ捨てが出来なくなつてしまつた。遅くなつたので一生懸命登つたが、もう何人か落伍者が出てきた。ぼくも途中で下山しなくなつた時が何度かあつた。けれども頑張ったかいがあつて頂上に着いた。ぼくは口では言い表せないほどうれしくて飛び上がりたい気持だった。

その後、昼食を食べて測候所までもう一息頑張つた。いよいよ頂上とお別れをして下山することになったが、今度は砂走りという強敵がまつていた。靴の中には火山灰が入つたり、靴がすべて真黒くなつてしまつた。だいぶ疲れているので遅れるし、足のヒザが笑いだしてくるし、いいことがなかつた。けれども日本で一番高い富士山の頂上まで登ることができたことは、とてもうれしかつた。遠くからながめる富士山は、美しい形をしていてやさしそうに見えるが、実際に登つてみると、きつくてくたびれてしまった。カブ隊のクマスカウトで富士山を征服したことを誇りとし、一生の良い想い出となることだろう。

カブラリーに行って

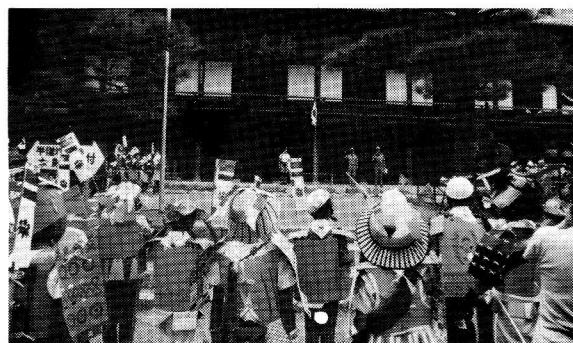
カブ隊 宮崎 正成

9月23日、窮屈なバスの中でぼくはあれこれいろいろなことを考えていた。カブラリーはどんなことをやるのか、夜店でどんな物を売っているのか。また、いいものがあったとしても、それを買えるだろうか、などと色々な考えが、ぼくの頭の中を走り回つた。そのような事を考えていると、時間は嘘のように早く過ぎて、気がついた時は奥山のバス停だった。

ここには2回ほど来た事があるので、すぐ解つた。三重の塔の広場に着くと、すでに他の隊のスカウト達も集まつて来ていた。荷物を置き、開会式、組集会その後、絵馬の交換をやつたり、運動会をやつた。最初のボール送りはビリになつてしまつた。次にでたのは着替競争で、これは1位になつた。最後にメドレーリレーをやつた。これは普通のリレーと違つていろんな走り方で走るのだ。ぼくは仰向きになつて走つたので、お尻りをひきずり、ズボンがすり切れてしまった。結果はぼくたち4団が優勝した。「頑張つて良かった。」と思った。

夜は夜店やカブ劇場があった。カブ劇場では「五条の大橋」や「やぶさめ」等はとてもおもしろかった。手品も「うまいなあー。」と感心した……。

2日目はまず座禅をする事から始まつた。座禅は初めての経験だったが、心の中ではラリーの事を考えていた。ヨロイとカブトを着て、広方寺の庭に集まつた。全員がヨロイ、カブトを着たので、武士の様な気がしてきた。クジを引くと7番と出た。



いざ出発するとおもしろい関所がたくさんあった。カモ狩りの時「よーし、当ててやるぞー。」と張り切つてやつたのはいいが、当たつたのはたつたの一羽だけだった。屋島の合戦の時は、おしい所をかすれてしまつた。途中で雨が降ってきた。そしてカブトの角は折れ、紙の後がけは破れてボロボロになり、落武者という感じがした。この後、「トラ狩り」や音を出さない様に歩く「鳴子」や「タカ狩り」等もあった。タカ狩りの時、タカの落した獲物がバナナとはちょっと変だと思った。そしてカブラリーも終つた。その時、ぼくは出発した時とだいぶ変つてゐた。「疲れたけれどなかなかやりがいがあったなあー。もう一度やりたいなあー。」

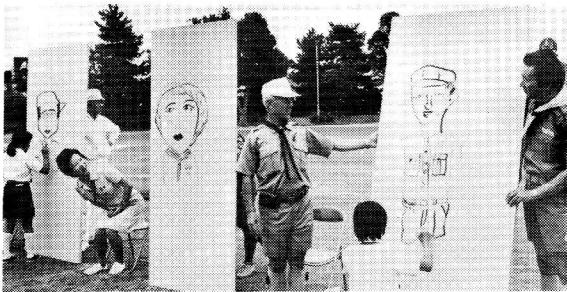
カブ3年目の僕にとって1番楽しい思い出だった。特に運動会の時、みんなが力を合わせて優勝したことはうれしかつた。この思い出はきっといつまでも忘れないと思う。

* 浜松第7団 * スカウトのひろば *

ハイキング

ボーイ隊コンドル班 森川重則

ぼくは、団ハイキングで佐久米東でバスをおりて持物点検後、いろいろ持物はジープにのせて、8時21分にしゅっぱつした。はじめのときは、あまりすごい坂はなかったのでらくに行けたが、半分ぐらい行ったら山をいくつもこえて、道でないようなところを歩いたりして足がきずだらけになってしまった。しばらくしたら、ワラビがいっぱいはえていたので、ぼくらの班は、ワラビとりに夢中になってしまって、前の人たちにどんどんぬかされていってしまった。植物の名前やそれは何科かというのをしらべていて、それぞれの木にかんぱんのようにつるしてあって、なるほどと思う木もたくさんあり、とてもいい勉強になったと思う。



ぼくは、黒松とうげやグリンバーなどではいつもビリを歩いていたがこのハイキングは、ビリではなかったので自分でもふしぎだった。すこし歩くと富幕山のパラボラアンテナが見えてきたのでほっとしていたら、まだ山を2つぐらいこさなければいけなかつたのでガックリきた。とちゅうで60度ぐらいのきゆうな坂をのぼったのでこわかった。ぼくは、下り坂で一回転してころんとしまったので、手や足を石でつよくうつしまってとても手や足にひびいた。

パラボラアンテナをすぎて、カブスカウトのいる野原でブタ汁を食べて奥山高原まで歩いていき、釣りを見ながらバスがくるのをまっていて、家に帰り、その日は手足がとてもいたかった。

団ハイキング

ボーイ隊タカ班 永田行央

5月13日に富幕山に団ハイキングに行きました。朝7時に家を出てバスに乗りました。そして佐久米東でおりました。ぼくは「がんばるぞ」と思いました。佐久米東から出発しました。ぼくは天狗岩までは、らくでした。けれど引佐峠まできたとき足がいたくなりました。とちゅうでいろいろな木を見ました。ぼくはいっしょにけんめい歩きました。そして、とちゅうで水とうの水を飲みました。ぼくはとてもつかれていたので「ごくごく」とたくさん飲みました。そしてまた歩き始めました。ぼくは「がんばろう」と思いました。けれど引佐峠の所はきつくてたまりませんでした。ぼくは歯をくいしばって登りました。ぼくの足はいたくてたまりません。けれど力いっぱい登り続けました。しばらくして50度の坂の所へ来ました。ぼくはころが

りそうになりました。足が又いたくなりました。もう足がつぶれそうになりました。ぼくは汗をかきながら歯をくいしばって登りました。そして下を見るどこわくなりました。そして登つたらとてもすっきりしました。又歩き続けました。そしてやつとのことで富幕山まで来ました。そしておばさんたちの所へ「おーい。」とさけぶと「おーい。」とかえってきました。ぼくはそのときおなかが、ペコペコでした。けれど道は大きくちがって上へ上へと登ってしまいました。そして隊長がこの所のゴミを「拾いなさい。」と言ったのでぼくは拾いました。そして下り坂は、とてもいい気持ちがしました。そして幡教寺跡まで来てカブの人たちが手をたたいて向かえてくれました。そしてお母さんがたが作ったブタ汁を食べました。ぼくは三ばいおかわりしました。そしてゲームや競走をしました。全部タカ班ぼくの班が勝ちました。そしてぼくの入隊式をやりました。最後のところでちょっとつっかかりましたがうまくいきました。そして奥山へと出発しました。公園の所でみんなで記念写真をとりました。しばらくしたら帰りのバスが来ました。ぼくはつかれていたので少しねむっていました。さっそくおふろに入りました。大変つかれたけれどみんなと楽しく、そして苦しくてもがんばり通したことは、気持ちがよいことだと思います。自信がついて勉強になりました。



カブラリーのこと

カブ隊 岩間敏章

9月23、24日に、おく山へカブラリーに行きました。23日の夜に夜店がならびました。ほかの団もきていて、とてもにぎやかでした。ぼくたちの7団は、うどんを売りました。ほかの団も食べものを売っていたけれど、げきもやった団もありました。てじなおじさんもきて、てじなを見せてくれました。はじめになにも入っていないはこをしめて、またひらくと白い小さな鳥が出てきました。ほかにいろいろやりました。どういうしかけになっているのか知りたいです。花火もやりました。24日に組でいっしょにけんめいに作ったよろいかぶとをきて、ゲームをやったりしてあそびました。天気がくもっていて雨もふったけれど、いっしょにけんめいがんばりました。合せんもしました。ぼくは、さいしょ下へおりていって、まだだんだん上に上がっていました。そして、木のかげにかくれて、てきの番号を言いました。そのうちぼくもてきに番号を言われて見つかって下へおりていきました。

もくてきちにつくと、ふく長が「三じゅうのとうに行って閉会式だから行きなさい。」と言いました。とても楽しかったカブラリーでした。

* 浜松第11団 * スカウトのひろば *

感想

カブ隊2組 鈴木敬教

はじめ中野学園にきてはじめてきがついたことは、ろうかがとてもきれいで、きょうしつもじゅうたんがしいてあってとてもいい気持ちでした。そしてみんなでカンケリをやって、とてもつかれました。そしてよるほしのはなしをきいて、はじめのうちはおもしろかったけれどもあとからあっちへいったり、こっちへいったりでなかなかおちつけませんでした。そしてねるときなかなかねれませんでした。それは、みんなでわらっていたからです。そしてあさおきたら、小楠くんや依田くんがおきていたのではやいなあとおもいました。それからハイキングにいってとてもつかれ、みちがわからなくてとてもつかれました。それでもちゃんといけました。そしてたいちようが牛にゅうをおごってくれて、のんだらとてもおいしかったです。でもゴクゴクのんでいたのでおいしいだけでなんにもあじがわかりませんでした。かえってきて、すこしやすんでカレーがおいしかったです。

静波海岸での思い出

第1ボーイ隊 児玉昌芳

7月の終りに、富士に3泊4日でキャンプに行った。そのときに静鉄スカウトの25周年記念行事のキャンプに招待されて、静波海岸に行つた。キャンプ場は海岸の近くで、塩のいいにおいがした。ぼくたちはべんとうを食べて、海に行つた。富士では、風呂がなかったので海に入れると思うとうれしくてたまらなかつた。松林をぬけて、海についた。静波海岸は波が立つてたし、広かつたので、早く泳ぎたくてたまらなかつた。隊長の注意を聞いて、体そうをした。そして、「分れ。」の合図があり、みんな、海へ飛びこんだ。「ヤッホー。」という声が所々で聞かれた。大きな波が多く、岸に流される人もいた。なん分かたつて、とつ然とてつもない大きな波が来た。2メートルはあった。ぼくは、びっくりして立ちすくんでいたが、波にまきこまれ、ぐるぐる回転しながら、流されていった。ぼくの他に、太田君とか松井君なんかが流されていった。足をつけようとしても、足がつかない。あわてて顔を出したら、砂で顔がまつ黒になつてた。顔をいそいで洗つて、みんなの所に行つた。このときに波にさからつてはいけないと思った。その後も、なん回か大きな波がきた。大きな波は、こわかったけど、ふつうのときは、とっても楽しかつた。泳ぎの間に、すいかわりもやつた。夜になって、花火大会、キャンプファイアをやつた。花火大会は、人が多くてよく見えなくてつまらなかつたけど、キャンプファイアでは、全々しらない人とも友だちになつたし、おどりなどがあつて、とっても楽しかつた。

キャンプファイアが終つて、テントに入るとき、みんな「楽しかつたね。静波に来てよかつたね。」と、言つてた。ぼくも、よかつたと思った。しかし、軽そうびだったので、虫にさされたり、手を切つたりしたので少しがっかりした面もあつた。

隼章挑戦キャンプに参加して

シニア隊 水谷全宏

今年の8月11日～14日まで、我々シニア隊3名は、隼章修目的とするキャンプを実施しました。今回のキャンプは、我々3名が初めて立案、計画、実施をしたものでした。

コースは、『真富士・竜瓜山走破』で、概略は、浜松--静岡=俵沢一俵峰一真富士山一俵峰一竜瓜山（薬師岳・文珠岳）一穂積神社一西里=清水--浜松、です。

今回のキャンプは、我々に貴重な体験をさせてくれましたし、それと同時に、数多くの問題を投げ掛けてくれました。

キャンプについての反省は、事前の研究不足により発生した「無駄」が多かったです。この「無駄」のため、我々は必要以上の苦労をしました。ある程度の苦しさは予想していましたが、今回は、その予想を上回るとてもきびしいキャンプだったと思います。



しかし、我々は、この苦しさに耐えて計画の8%を達成することができました。そして、行程を無事に終了したことにより、我々は、精神的に一回り大きな人間になったと思います。

そこで、なぜ我々は、自らこんな苦しみを求めるのか、今ここで僕が言えることは、単に、自分がスカウトであり、それがための義務的な行為ではないということです。キャンプの期間中は、なぜこんなに苦労しなくてはならないのかを真剣に考えました。ところが実際は、その結論が出ないままに、苦しみはいつのまにか終つていました。今一度、そのことについて考えてみても、また結論はでませんでした。

しかし、数々の苦しさから逃げようとする自分の心を、あえてその苦しさにぶつけることは、何事に対しても持ちうる、自己の無限の可能性を知る一つの機会であるような気がします。その機会を求めて、我々はあえて苦しみにtryするのではないか、そんなことを感じました。

“Let's try”これこそが、僕が思つてゐる今後のシニア活動です。ただ単にtryするのではなく、綿密な計画に基づいてtryすることです。

今回のキャンプは、精神的、体力的に強くなつただけではなく、何のためのシニアスカウト活動であるかを考える機会を与えてくれました。そのようなことで、我々が、立案、計画、実施をしたキャンプは、大変有意義であったと思います。

* 浜松第12団 * スカウトのひろば *

秋葉山へ行ったこと

カブ隊4組 天野 賢一

ぼくは、8月の25日と26日に秋葉山へしゃえいに行きました。ぼくはその中でも、とくに26日の山ちょうどへ着くまでが楽しかったです。

その日の朝は、起きてざぜんをして朝ごはんを食べました。とてもおいしかったです。それから朝れいをしてゲームをして出かけました。かなり急だったけど、山の中だからへいきでした。ときどき、アブやアリがいました。アブがハエだったらなあ、とぼくは思いました。なぜかと言うと、登る時にいろいろな物を集めると言われて、その中に、ハエ4ひき、と言うのがあったからです。と中に、大きな門みたいのがありました。デンマザーが、「この門の柱は、2本の木をくぎを使わないでつないでいるのよ。」と言った。ぼくは、どんなふうにつなげたのかな、ととてもふしぎに思った。

その後もどんどん歩いていくと、くらかった道がだんだん明るくなってきた。そしてついに、山ちょうどの秋葉神社についた。ぼくは思わず、「やったあー。」とさけんでしまった。そこで水を飲んでいたら、デンマザーがあめをくれた。あまくておいしかった。ぼくは、今までのつかれなど、どこかにふきとんでしまったな、と思った。

その後、今度は山を下っていった。細い道、じゃり道、草ぼうぼうの道など、いろいろな道があった。と中、だれかが、「ヘビができるぞー。」と言ったので、少しこわかったが、とうとうヘビはでなかった。昼ごはんも山の中でした。すると、ハエが集まってきた。だれかが、「わあーハエだ。つかまえろ。」と言った。おかげでぼくの組は、やっとハエを2ひきつかまえた。あとはバスにのって帰った。とても楽しかったです。



あき葉山キャンプの思い出

カブ隊 宮川 貴史

カブスカウトであきはさんへいって、いち番いんじょうにのこったのはキャンプファイアです。

花火をやったり、歌をうたったり、もえる火をかこんでたのしくやったことです。ボーイスカウトのお兄さんたちが、とく

にしどうしてくれたので楽しくできました。

ざぜんは、心をやすらげるためにやるものだと、おじょうさんがいっていました。

足がしづれてしづれてたまらなくて、くるしかったです。でもすこしは、気がおちついてきました。それに、たまにはああいうくるしみをのりこえなければ、カブスカウトにはいったかいがなくなってしまいますので、たまにはくるしみをのりこえなければいけないです。

山をおりるときは、「またくるぞ、きっと。」とおもって山をおきました。もうさいごはすこしつかれてしまいました。



あきはさんキャンプ

カブ隊 杉浦 元

なつ休みのキャンプで1ばん心にのこったのは、山のぼりだ。昼ごはんをたべて、いよいよしゅっぱつだ。くみごとにしゅっぱつした。ぼくのくみは、さいしょにしゅっぱつした。と中で、虫やくさとりながらのぼった。だいぶいくと、水がながれていた。その水は、山の水だ。さらさらと音を立てて流れていた。手でさわると、とてもつめたかった。木がしげっていて、山の中は、とてもひんやりとしていた。はじめのうちは、きもちよかったですけど、のぼっていくと、あせがだらだらとながれてきた。上からおとなのがおりてきた。しばやまくんのおとうさんが、三じやくぼうにはあとどのくらいありますかと何どかきいた。さいごのほうで、「もうすぐですよ。」と、いった。ぼくは、「よかったな。」と、おもった。すこしあるいていくと、三じやくぼうへついた。ほかのくみの人たちも、ぞくぞくとのぼってきた。「やっとついたな。」と、思った。

つぎに、しゃせいをした。ほんどうの絵をかいた。うまくかけられなかった。夕がたになったので、夕ごはんになった。カレーライスだった。おいしかった。くらくなつて、キャンプファイアをやることになった。木をかさねて、火をつけた。ぼうぼうもえた。デンチーフが歌をうたったり、花火をしてくれた。ぼくたちにも花火をやらしてくれた。とてもきれいだった。そしてお寺にはいって、おふろにはいった。ぼくのおふろより、ひろかった。いい気もちだった。そしてようふくをきて、ねた。なかなかねれなかったけどとても心にのこったキャンプだった。

* 浜松第19団 * スカウトのひろば *

ボーイスカウトに入って

少年隊ワシ班 石原 隆

ボーイスカウトに入って、半年たった。今までに、隊集会や野営などいろいろな事があった。

野営などでは、ぼくたち初級にたくさん仕事があった。食器洗いなどはだいたい、ぼくたち初級がやった。この他、いろいろな仕事があった。それに、隊集会の時にやる手旗などを覚えるのや、その他いろいろな事で手こずった。でも、1つ1つを班長などにおそわりながら覚えて、今ではボーイスカウトの活動になれてきた。

あと半年で1年になるけれども、いろいろな経験を積んで、いろいろなことを知りたいと思う。そして、早く2級スカウト、1級スカウトと進級していきたいと思う。



組集会

第2カブ隊3組 高林慎享

9月の組集会は、とてもたいへんでした。なぜかというと、9月23・24日に奥山でカブラリーがあり、その時につかうよろいや、かぶと、ゆみやなど作るからです。

かぶと、よろい、ゆみやは、デンマザーからていねいに教えてもらい、うまくできました。一番たいへんなのは、よろい作りでした。もようなどを書くからです。もしほかの組よりへただったら、いやです。ゆみを作つてみんなで、テストをしてみたのですが、ぼくのは、あまりよく飛ばなかったので、とてもがっかりしてしまいました。かぶとやよろいの出来あがっていない人は、家でやることになりました。かぶとを家で、うまく作れる自信はなかったけど、一生けんめい作りました。

キャンプに行って

少年隊ハト班 佐々木義明

ぼくは、カブからボーイになってキャンプがあるのが楽しみです。

9月23・24の2日間、奥山の近くの芝形へキャンプを行った。

ぼくたち初級は、配せんやまきわりの手伝いをした。五月のキャンプでは、とても水くみがたいへで洋服がびっしょりになつたのが、このキャンプ場はすぐそばに川があったのでよかった。

班長にナイフの使い方を教わった。教わる前は、早く使いたくてたまりませんでした。ぼくは、よく手を切つたりするので今教わったことを忘れないで気をつけて使いたい。

夜の消燈時間が過ぎても外でみんな遊んでいるのでぼくもいっしょに遊んでしまいました。でも、決まりは守らなければいけないので、これからはきちんと守るようにしたいと反省しています。

西部大会へ参加して

第1カブ隊4組 大谷 健

9月16日に、ぼくたちは袋井で行われた西部大会に参加した。初め、どんなことをやるか心配で、むねがどきどきした。開会式が終ってともだちとあそぼうの組を作った。それは、他の団の人達がバラバラになって、1つの組を作るのだ。ぼくらの組は、おもしろそうな人がそろった。ぼくは、すぐその人たちと、友達になった。そして、いろいろなコーナーをまわり、5回ぐらいやっておべんとうをたべた。そのとき一人いなくなってしまったのだ。みんなできがしてやつと見つかったので、またコーナーをまわった。

暗夜行路や、バズーカ砲がおもしろかった。そして、11コやって、合格の印をもらった。まだやりたい物がたくさんあったがこんでいてできなかつた。でもとてもたのしい1日だった。ぼくにとっていい思いでになると思う。



中川根研修所へ行って

第1カブ隊2組 石井克明

8月18日浜松駅に集合したぼくらは、冒険旅行に出かけた。電車に約30分ゆられて、金谷についたぼくらは、いよいよかと思った。ところが大まちがいだった。今度は、たつた2両の大井川鉄道に、一時間半も立つままゆられなければならなかつた。そして、大雨の中を約2 km歩いて、やつと現地についた。

雨のため、いろいろなもよおし物が中止になつた。そのため、デン作りをした。ぼくらは、1位になつた。みんなよくがんばつたと思う。それから、室内でいろいろなゲームもした。夜、計画したキャンプファイヤーも、キャンドルセレモニーになつてしまつた。

* 浜松第24団 * スカウトのひろば *

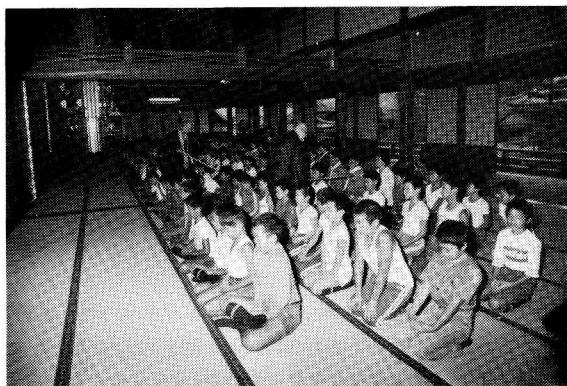
奥山に行って

カブ隊4組 中村明宏

9月23日、ぼくは、奥山に行った。行くまえから、楽しみにしていた。集合に、おくれそうになったが、まにあった。

車にのって、奥山三重塔広場に集合した。ついた時、ほかの団がいた。ぼくは「だいたい8回ぐらいいるんだな」と、思いました。十時半、開会式があった。ぼくは「いよいよはじまるんだな」と思いました。宿舎にいって、すぐ、おふろにはいりました。夕食を食べて、夜店に行きました。一番初めは、わなげをしました。のどがかわいていたので、ジュースにむかって、「えいっ」と、なげました。みごとはいりました。そして、また、宿舎にもどって、ねました。

次の日、朝早くから、座禅をしました。だんだん足がいたくなりました。おわって、朝食を食べました。そして、まちにまつたカブラリーがはじました。思ったよりもかんたんだった。一番おもしろかった事は、ゆみで、やることだった。ゆみで、あたらなかったのは、屋島の合戦だけだった。そして、奥山三重塔広場へもどった時、24団では、最ごだった。24団のほうへ行こうとしたら、どこからかはくしゅがしてきた。ぼくは、うれしかった。そして、帰る時、いろいろな事を思い出しながら、車にのった。と中できもちがわるくなつたが、がまんした。ぼくは、もう一度いきたいなと、思いました。



楽しかったカブラリー

カブ隊木下径彦

「パーン。ワーアー」さあ始まった。いまぼくらは山の中でげんぺい合戦だ。山の下へおりて道がない所は道をつくって、前へ進んでいく。はやく下へいかないと、と急ぐ。パーン、やつと終った。短いのに長く感じた。下へおりて、さあ次のゲームだ。こんどは組ごとで早く次のゲームへ行きたいのでならんだ。道はトンネルのように草がはえているゲームの所へいった。

トラ狩りと書いてあったがねこのような絵が、書いてあるので、わらえてたまらなかった。ゲームはおしい所で1つもあらなかつた。また次の場所へ歩いた。こんどの道は草はあまりはえてなくまああの道だった。次は鳴子だった。鳴子は、しんちように行つた。だから1つも鳴らなかつた。次にすぐ暗夜行路があつた。とてもぼくは大すきだ。隊長はぜつたい目を

開けるなといった。ぼくは、目を開けたら、暗夜行路でのたのしみがなくなると思い目をつぶり一生懸命がんばつた。次は最後の課目たか狩だった。そしてたか狩はどうやるかをいいなさいと隊長がいったからぼくが「たか狩はたかをはなしてたかでえ物をとらす」といたら、ちがうといった。なぜちがうのかと思った。でもぼくは、たか狩とかいてあるので、たかの絵をゆみやであるのだと思った。たかがおとしたバナナをくれたのでおいしく食べました。

カブラリーはとても楽しくよい思いでになった。

キャンポリー

ボーイ隊イーグル班 小野川知秀

ぼくは、このキャンポリーで心に強く残ったことは、大営火のことです。大営火のとき行う、スタンツと歌を決めたとき、うまくできるかどうか少し不安でした。

大営火が始まって、自分たちの番がきたとき、不安な心がもりあがってどきっとしました。ぼくたちの行うスタンツは、かき太郎というのです。これは、桃太郎をもじった物で、かき太郎のこい人がでてきて、おもしろおかしくスタンツをぶじに終わりました。そのときは、ほんとうにほつとしました。司会者の人がうまいとほめてくれたので、とてもうれしかったです。歌はロックマイソウと連盟歌を歌い、このときもほめられたので、ばんばんざいました。

このキャンプを通してとても、自分のためになったと思いません。さらあらい、火のおこし方などをおぼえました。水のたいせつさは、しみじみと感じさせられました。このキャンプのように、これからキャンプもがんばろうと思います。

富士キャンポリー

ボーイ隊シルバーフォックス班 安藤元昭

ぼくは、最初こんな所でキャンプができるのかなと思いました。それは、土がぬかるんでいて、地盤がやわらかく、木になる木がみんなしめっていたからです。最初はわくわくしていましたけど、だんだんキャンプのきびしさがわかりました。遠い所まで水くみに行かなくてはいけないことと、自分たちの使った皿やはし、どんぶりなどを自分たちの使った物をみな洗わなければいけないことです。このキャンプでぼくは、親にあまえすぎていると思いました。それから、いままでは店で売っている物を買って使っていたけれど、このキャンプでは、きまったく物でその日のりょうりしなければいけないことです。それと水をなるべく多く使わないようにする事です。いままでは、水のことなど気にしないでむだに使っていたけれど、このキャンプで水の大切さがわかりました。ぼくは、こういうキャンプを積みかさねてもっと物の大切さやせつやくのしかたも学びたいと思います。

このキャンプはとても楽しかったです。もっとこのようなキャンプに参加してりっぱなボーイスカウトになりたいと、思います。

* 細江第1団 * スカウトのひろば *

東海ブロックカブラリーに参加して

カブ隊副長補 水田 隆久

太陽がさんさんと照る中、スカウト達が飛び回っている。友だちを作り交歓しているもの、ゲームに参加しているもの、手をつないで歩いているもの、みんな楽しそうだ。そういう時の子供たちはひとりひとり、みな輝いているように見える。すばらしいことだと思う。

今年は国際児童年だ。子供の置かれている環境を見つめ、改めて考えなおそうということが趣旨である。私はこう思う。日本の子供たちはみんな幸せだな……。私たちは、この幸せがいつまでも続くように努力しなければいけないんだな。

何千人のスカウト達が、友だちをつくりながら、仲良しの輪を大きく広げていく姿を、愛知県青少年公園で見たような気がする。



1組スカウト一同

8月19日にはぼくら細江1団は、名古屋へカブラリーに行った。はじめカブラリーは、ハイキングのように山道やふつうの道を歩くのだと思ったが、ちがった。

開会式のときのえんそは、子どもなのに大人なみであった。ぼくら細江は組単位で行動した。見物しているとき、時間がなかったので全部を、うまく見られなかった。

の中でもロボットかんがおもしろかった。ロボットのしゅるいがたくさんあった。楽器ロボットは、1つのロボットが、たくさんの楽器をえんそしていたので、おもしろかった。ゆりかごロボットもあった。赤ちゃんを、ゆりかごにいれてそれをゆらしていた。ロボットの内部が見え、コードがたくさんあっておもしろい、メカニズムだった。このようなロボットが一ぱんの家庭でしようされると人間はなまけて働くくなってしまふとぼくは思う。

そのほか愛知子ども百年を見た。いろいろな国の子どもの写真があった。びんぼうな子や病気の子の様子を写した写真があった。

ほかに、昔の人の遊び道具を見た。遊び道具は、木製の手作りで、昔の人はいろいろな道具に苦労したと思った。このようなことは、自分自身で勉強になった。まだ、見たらいいところがあるのでう一回見たいと思う。

2組スカウト一同

ぼくたち2組は東海ブロックカブラリーで子供の世界館へ入り、見てきました。世界の子供の紹介です。山と森の子供、すばらしい田園、草原に生きる子供、雨とおりの生活をしている子供、大都会の子供の1日等、いろいろ子供の生活の様子や、きもの、食事、学校での様子、世界中の子供がそれぞれちがった生活の様子がパネルでよくわかりました。パネルには「子供は希望、みらい、心、夢」をえがいています。又、世界館の中にこんな言葉も書いてありました。

『子供には過去はありません。あるのは、現在とみらいだけです。むげんの可能性の広い中で毎日をいきています。自分のみらい、社会のこと、子供のゆめはかぎりなくふくらんでいるのです。ゆめを大きく育ててあげたい。ゆめは子供の命だからです。』

この日はとてもあつい日で、世界館へ入るのがとても長い列を作り、まっていました。中へ入っても「とまつてはいけません」とマイクをもったガードマンがついていて、ありの行列のように歩いていくだけで、あまりよくみれませんでした。

世界館を出て、ぼくたちは友情交歓カードをおねがいしました。ぼくは、西春日井、佐屋1団、名古屋3団、半田7団、岐阜下呂1団と11人のお友達と交歓カードを書いてもらったり、かいてやりました。帰る時、名古屋30団の団委員長さんもカードに住所を書いてくれました。ぼくはさっそく手紙を書きます。そして友達になりたいと思っています。

しらない友達ともすぐあいさつが出来ました。カブスカウトの集会はとても大勢の人が集まりました。あつい一日でしたが、とても楽しかったです。

3組スカウト一同

東海地区カブラリーの日は、とてもあつかった。カブラリーの会場である、愛知青少年公園はどんな所か楽しみだった。会場へつくと、ぼくは旗手といわれた。開会式がとても長く感じた。もっとすしければなあと思った。

昼食の時、みんなにめいしの交かんをしてもらった。友達ができてよかったです。でも今はもう10人とも顔をわすれてしまった。顔を覚えておけばよかったと思っている。

ぼくたちは、むかしのおもちゃをしらべるというテーマがあった。だからやっている所をさがしまわった。だれかに聞くと「きょうはやっていない」というこたえだった。がっくりきた。

テーマはできなかったけど、いろいろな物があって、いいところだと思います。

4組スカウト一同

ぼくたちは、東海ブロックカブラリーに参加しました。暑い日差しのもとで約1万2千人のぼくたちの仲間が集り、広い会場だったので、話がよく聞えませんでした。

式典が終ったあとは国際児童年会場を見学しました。すごい人なので、すいている所からはいました。ぼくたちはアニメーションについてまとめました。毎日見ているテレビのマンガが出来るまでには、大変手間がかかっていることがわかりました。それから子どものパビリオンでは、世界中の子どもの半分

*引佐第2団*スカウトのひろば*

カブキャンプをふり返って

カブ隊長 内山隆治郎

カブ隊発隊3年目、カブ隊独自のキャンプがこの夏休みを利用して実施されました。どのような計画で実施したら良いか、手探りの我々にとって、大変なことでした。度々のリーダー会の末、出来上ったプロにカブ達が喜んで参加するだろうか?。そんな不安の錯綜する中でキャンプに入りました。

8月8日、天候にも恵まれキャンプ地である井伊谷宮及び竜潭寺の境内にてキャンプが開会されました。

集まって来るスカウトの元気な姿、輝いた日、キャンプを成功させなければ誓わざるを得ません。順調なプロの流れと共に、木影での組集会、森に響くスカウトの歌声、なれない手つきで小刀を使い、いずれもスカウトの真剣な取り組み方がうかがわれました。DCの助けを借りて出来上っていく、スカウト工作の水鉄砲、割箸銃、それぞれカブ達が工夫し、協力して制作する作品。それは楽しい仲間の結晶でした。キャンプの全日程を通して、デンマさん達の力強い応援・協力をいただき、カブ隊活動の中枢としてのデンマさんが活躍して下さった事を高く評価しなければなりません。



又、キャンプの中でカブ達の家族とはなれての共同生活の協調性、又、自然への親しみと感謝の心、生活中でいくつかの体験を積むことによって、やがては良き社会人となるべき道のりを少しでもスカウト自身がつかむことが出来たとしたら、今回のキャンプのもつ意義を高く評価して良いような気がいました。良き社会人に育てたい、スカウトを育てようとするリーダーが社会人の鏡となって今後も頑張りたいものです。

舎營に参加して

カブ隊2組 谷川 淳

1泊2日のキャンプは、とても楽しかった。1日のキャン

プファイサーはおもしろかった。ぼくたちは、げきをやったけど、歌をうたえなかったので残念だった。2日目のピクニック世界一周旅行に使う道具をスカウト工作の時間に作った。ぼくの水鉄砲はよくとんだ。いよいよ世界一周旅行だ。始まる前から胸がワクワクした。ぼくはコースの中のおみくじで「大吉」がでたのでうれしかった。ぼくたちは、イギリスのところで、まちがえてしまってデンマさんたちに言われてやりなおしをした。そしてどんどんコースを進んで、いよいよぼくのすきな釣り「メキシコ湾の珍魚つり」にきた。ぼくは、よし釣るぞ!!と思いつどんと釣った。ぼくは、1人で15匹以上釣ることができた。その中2匹は大きかった。最後のハワイのフラダンス大会は、はずかしかった。でもなかなかうまくできたのでよかった。この2日間のキャンプはとてもいいいけいけんになりました。



おもしろかったキャンプ

カブ隊1組 池田吉見

キャンプの中で、ぼくが一番おもしろかったのは、ピクニック「世界一周旅行です」。中でも「もうじゅう」を自分で作った〔スカウト工作〕水でっぽうでやっつけるのと、釣りがおもしろかったです。ことは、カブ隊最後のキャンプでした。世界一周旅行の点数は悪かったけれど、とても楽しいキャンプでした。

野えいにさんかして

カブ隊3組 安間 孝

ぼくは、キャンプにいって一番心にのこったことは、世界一周旅行です。ピクニックの一番始めから一番さい後まで、わらいでいっぱいでした。とってもおもしろいキャンプでした。ピクニックのコースの中で、とくにおもしろかったのはハワイでのフラダンス大会でした。

な所を調べることになった時は、少しいやだった気持ちもありました。友情交歓カードは、友だちを作る大切な一まいの紙だと思います。友情交歓カードを交かんするのは、各組に出した勉強をやる前に交かんしました。みんな交かん中なのです、まっていたら5組の人がまっているように見えたので、みんなにめいわくがかかるないように、早く交かんしました。少し暑い日だったけれど、思い出に残りそうな日でした。

5組スカウト一同

名古屋で行なわれた東海カブラリーの日はとても暑い日でした。細江第1団は各組に勉強を言いわたしたように、いろいろ

西部ブロックキャンポリーに 参加して

浜松第4団ボーイ隊 今井正人

ぼくは西部ブロック4泊5日の長期キャンプに参加していろいろなことを知り、またいろいろな体験をしました。

このキャンプは、ぼくたち6年生がボーイ隊に入つて初めての野営のキャンプです。

ぼくはカブ隊のころボーイ隊のテント張りを見たことが何回かあります。自分達の力で自分達のテントを張るのが、こんなにややこしく大変だとは思ってもみませんでした。その上、その日は雨が降っていて、とてもやりにくく苦労しました。そのおかげでテントの張り方が、だいたいわかるようになりました。次に、つらかったのは第2広場という広場から、ぼくたちのキャンプ地までとても長い道のりだということです。ぼくは荷物運びを受けもち最初の日だけで5往復もしました。



富士登山中の一行

又、その第2広場の横に便所があるため大便をするとき、わざわざ下へ行かなければいけないのでとてもいやでした。『家では、すぐ出せるのに』と何度も思いました。

ぼく達4団は3日目に富士登山することになっていました。その前夜は8時ごろねました。次の日は、0時45分ごろ起床して点検をしてから出発しました。2時にカブ隊と合流して一緒にバスで新5合目まで行き、朝食をとり4時ごろ登り始めました。ぼくは富士登山をするのは2度目です。7合目までは『こんな山へっちゃらだい。』なんていっていたけれど、そこをすぎると、だんだん息が苦しくなり途中で下山したりしました。でもリーダーの後から、がんばって登ったら、やっと頂上にたどりつけました。頂上での空気はとてもおいしく、やっぱりがまんして登って良かったと、つくづく思いました。頂上で残念に思ったのは、千葉隊長がみんなのために前夜おにぎりを3つずつ作ってくれたのに、高山のためか、食欲がなくなり、1つしか食べれなかった事だ。

4日目は、ハイキングで大沢くずれを見に行きました。ぼくは目の前でくずれた所を見て、とてもびっくりしました。

夜はつかれて家の事など思い出すひまもなくぐっすりねて、いつの間にか5日間がすぎてしまいました。

楽しい事、つらい事、いろいろ体験でき、とても良い思い出になりました。

地区のうごき

- 7月15日 第4回リーダー養成講座（曳馬公民館）
- 18日 中央小地区リーダー会（法林寺）
- 21～22日 ヨット講習会〔3級〕（寸座マリーナ）
- 23日 シニアリーダー会（法林寺）
- 26日 フィルモント派遣＝出発
- 30日 指導者養成委員会（法林寺）
- 31日 ヨット委員会（法林寺）
- 8月2日 中央小地区委員長会議（法林寺）
- 4～5日 ヨット講習会〔2級〕（寸座マリーナ）
- 5日 浜松第20回10周年（入野小）
- 8日 進歩委員会（法林寺）
- 9日 中央小地区リーダー会（法林寺）
- 10日 健康安全委員会（法林寺）
- 11～15日 県連第8回アドベンチャーキャンプ
(グリーンキャンプ場)
- 15日 フィルモント派遣＝帰着
- 15日 中央小地区リーダー会（法林寺）
- 18日 地区シニアースカウト会議（法林寺）
- 19日 東海カブラリー（愛知県民の森）
- 23日 地区コミ会議（法林寺）
- 25～26日 ヨット講習会〔1級〕（寸座マリーナ）
- 31日 シニアリーダー研修会（松菱屋上）
- 9月8日 地区シニアースカウト会議（法林寺）
- 9日 中央小地区運動会（中田島海浜公園）
- 15日 浜松第1回25周年（法林寺）
- 16日 県大会（袋井）
- 18日 J.O.T.A. 打合せ（法林寺）
- 19日 中央小地区リーダー会（法林寺）
- 29～30日 中央小地区リーダー研修会・野営法その3
(青少年の家)
- 10月2日 地区訓練チーム会議（法林寺）
- 6日 地区委員会（法林寺）
- 7日 県西部面接委員研修会（南部公民館）
- 10日 地区ソフトボール打合せ（法林寺）
- 14日 第5回リーダー養成講座（青少年の家）
- 15日 地区コミ会議（法林寺）
- 16日 野営行事委員会（法林寺）
- 17日 中央小地区リーダー会（法林寺）

あとがき

国際児童年にあたり、浜松市でも「子供フェスティバル」を来る11月18日に佐鳴湖公園で開催致します。ボイスカウト浜松地区と他の青少年団体との共催ですがボイスカウトの浜松地区大会を兼ねる行事となります。

本号ではフィルモント派遣隊員や西部小地区各団の夏の野営活動等多くの原稿を頂きました。

本号は西部、引佐小地区の担当です。次号は南部小地区担当にて発行します。

(S. Y記)

発行所

第77号

日本ボイスカウト浜松地区事務所
浜松市利町70-4 児童会館内
編集発行責任者 山中 将司
印刷所 (株)朝日堂印刷所
昭和54年10月25日発行